
ツキを見て泣いたヒト

.neko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツキを見て泣いたヒト

【Nコード】

N0583Z

【作者名】

.neko

【あらすじ】

女神と魔王の伝説が伝わる大地ビルナード。そこを舞台として、魔王と鏡をめぐる一つの物語が幕を開く。

光

光。

それは美しい光であった。

まるで全てを忘れさせてくれるかのようにであった。

少なくとも、その人影はそう願っていた。

暗い闇夜に一人立ち、天から降り注ぐその光をいつまでも眺めていた。

優しく包むその光は、その人影にとって唯一の味方にすら感じられた。

でも、それは逆だった。

どれだけ願っても、その人影が満たされることはなかった。その見つめる先にある輝きに、ただ縛られるだけであった。

あの輝きだけが、今もこの目の前から離れられない。

1 彼は魔王を追う

少年は一人、空を見上げていた。

時刻は夜。少年の視線の先にあるのは月であつた。大きな満月。その光はただ静かに少年の立つ草原を照らしている。それを少年はただじつと見つめていた。

（リユート・フェイタス）

それが少年の名前である。

年齢は十八歳。服装は見るからに田舎出身というものであり、都会らしい華々しさは微塵もない。だが、その背中にある長剣のことを考えれば、かえつてその方が自然に映る。

そのリユートに声を掛ける人影があつた。

「いい月夜だな」

声に気づいたリユートは、その方向を向く。

そこに映るのは、リユートよりやや年上の青年だつた。額のバナダナが特徴的だ。また、リユートと同じく背中に長剣を携えている。その青年を見て、リユートは眉をひそめる。

「……そうですね」

「ははは、警戒しなくてもいい。賊だつたら、襲う前に話し掛けたりしないさ。俺はミトン。少し聞きたいことがあつてな」

リユートはまだ警戒を解かない。

「僕に聞きたいこと？」

「名前、リユートって言うんだろ？」

その言葉に、リユートは思わず一步退く。

「……どこかで会ったことがありますか？」

「いや、初対面だ。パドに立ち寄ったときに、自警所で依頼を受けただろ？　そこで名前を聞いたんだ」

そこまで聞いて、ようやくリユートは納得する。それにしても、依頼を受けた人間の情報をこうも簡単に漏らすとは。とはいえ、今回の場合、“依頼”が“依頼”だ。仕方ないのかもしれない。

こうなると、このミトンという青年の目的も何となく想像できる。

「それで、僕に何の用です？」

「その依頼を手伝ってやろうと思ってな。一人では何かと大変な依頼だ」

やはり、とリユートは思う。

その一方で、リユートに断る理由はない。依頼報酬が目的なわけではなく、わざわざ一人で苦難の道を選ぶこともない。その上、リユートが求めている“もの”を得るには、こういう輩との関係も必要だろう。

リユートは、ミトンを見る。自信に満ちた笑みとはこのことを言うのだろう。この種の人間に断るということを考えるだけ無駄だ。そう感じたリユートは決心する。

「助かります」

「話分かるな。俺の方こそよろしくな」

そして、二人は暗闇の中へと消えていった。

『この依頼をお願いします』

そう言つて少年は一枚のちらしを渡す。その先には、カウンターを挟んで中年の男が立っている。その男は、そのちらしを見るや血相を変える。

『ガイタ村のつ……』

少年は頷き、そして真剣な瞳で男の目を見る。だが、男は首を横に振る。半ば呆れ顔だ。

『悪いことは言わない。あんた、まだ若いんだ。命を大切にしろな。これはギルドに依頼する予定なんだ』

『でも、揭示されていました』

『う……ん』

男は返答に困り、困つたようにちらしを見る。

最近になり村に魔物が現れ始めました。

勇敢なお方、どうか魔物を退治してください。

報酬は村中から集めた一千万リンを用意してあります。

よろしくお願いいたします。

村一同

ガイタ

『……はあ。一獲千金って言ってもなあ。命あってなんだぞ?』

『……』

『ああ、分かったよ。でも、責任は持たないからな。名前は? 紹介状を書くから』

『リユート・フェイタス』

ちょうど三年くらい前からだろうか。この地方に”魔物”と呼ばれる存在が突如として現れた。

最初の頃はそれほど多くもなく、大した脅威ではなかった。しかし、その被害は次第に大きくなっていった。最近では、魔物を恐れ、この地方を去る者も現れ始めている。

それと同時に魔物退治に乗り出す者達も現れた。その筆頭は、この地方の首都バリプレートが誇る聖騎士団だ。それに続くのが、魔物退治の依頼を請け負う幾つかのギルド。また、少数ではあるが、リユートやミトンのように個人で動く者も存在する。

もっとも、個人で活動する者の多くは、特別な事情を抱えているものだが。

時刻にして二十時過ぎであろう。いつの間にか入り込んでいた森は静まり返っている。微かな月明かりはあるものの、やはりその光景は不気味さの方が強い。こうなると、急な同行人でもありがたく

感じる。少し前を歩いていたその同行人が、不意に振り返る。

「あそこに小屋がある。そろそろ休まないか？ まだ距離もあるんだ。無理して一晩中歩くこともないだろう」

そう言い終えると、ミトンは小屋の方へ足を進める。もとより返答を待つつもりなどなかったのだろう。リュートもそれに続く。

木造の小屋はしっかりしたものであり、毛布なども用意されている。おそらくは、ガイタ村の人間が、町に出るときに使用している小屋なのだろう。

「悪くはないが、ここ最近は使われていないようだな。仕方ないか」

「そうですね」

そう返事しながらリュートは荷物を置く。そして、ボトルに入った水を飲む。その様子を見ていたミトンが口を開く。

「随分と落ち着いているな」

「そう見えますか？ 緊張はしていますよ。でも、後悔するくらいなら依頼なんて受けない。それにお互い様ですよな？」

「俺か？ なるほど、それもそうだな。とはいえ、俺は強いからな。魔物には負けないさ」

「だったら、僕も同じですよ」

「はは、そういう性格は好きだな。そういえば、お前はギルドには所属していないのか？」

「僕は入っていません。ミトンは？」

「いや、俺も未所属だ。だが、いつもは気の合うパートナーが一緒に。魔物を確実に仕留めるなら、仲間が必要だろ？」

「……魔物は目的ではないですから」

「どついつことだ？」

そのとき、一瞬の間が訪れる。

「ミトンも当然聞いたことがありますよね？ あの噂を」

「噂？」

「魔王、ですよ」

一瞬、ミトンの眉が微かに動いた。

魔王。

それはこの地方に古くから伝わる”女神伝説”の登場人物である。女神伝説の内容は他愛の無いもので、悪い魔王が女神に選ばれた戦士によって退治される、というものである。

世界各地でこのような伝説は数多く残されているが、いずれもただの伝説で終わっている。それに対して、この地方だけは少し異質である。ただの伝説とする人間はもちろんいる。ただし、それはごく少数であり、大多数は女神伝説を実話として信じている。

歴史書を眺めてみると、そこには幾つもの動乱が記されており、そしてそれを沈静した英雄の名も記されている。長い歴史の中でよくあること、と部外者であればそう言うだろう。だが、この地方の人々は口を揃えてこれを”魔王”と”女神の戦士”の戦いと呼んでいる。学者といった知識人ですら例外ではない。

おそらく最後の魔王とされているアティラスの存在が、千年前と伝説にしては新しいことが手伝っているのだろう。この地方の首都バリプレート建国時期とも重なっており、不信者の中にはバリプレート王家が歴史に脚色を付けた、とする者もいるが。

「別に気を遣ってくれなくてもいいですよ。おかしいってことは分かっていますから。でも、僕はどうしても探さないとイケないんで

す」

「まだ”噂”だけだとしてもか？」

リユートは静かに頷く。そして、そのまま横になる。

「すみません。今日はそろそろ休ませてください」
「そうだな」

ミトンも横になる。そして、夜は静かに更けていく。

2 ガイタ村と狼

「あと一時間もかからないだろう」

そう言つて、ミトンはリユートを先導する。昨日と変わらない接し方だ。しかし、リユートのことを気遣つてか、“魔王”という言葉は一言も発していない。

正直なところ、おかしい奴と思われても不思議ではない。この地方の人間は、魔王の存在を信じてはいる。魔物が現れ始めた頃は、魔王誕生の噂で大騒ぎとなった。しかし、この三年もの間、魔王は人々の前に姿を現さなかった。次第に騒ぎ立てる者は減つていき、今では一部の魔王崇拝者くらいとなっている。旅先でも何度も笑いものになった。

そのためか、リユートはこのミトンの態度にやや違和感を感じていた。だが、これから魔物退治を共にする者同士。わざわざ気まぐしい思いをする必要はない。ミトンもそう考えているのだろう。だから、リユートもあえて“魔王”という言葉を避けた。

そのような状況のまま二人は足を進め、ようやくガイタ村を視界に入れた。

■狼の村ガイタ

村は静まり返っていた。

昼間だというのに、外を歩く人はいない。いや、それどころか人の声すらない。事情を知らない人間であれば、廃村と勘違いしてもおかしくはないだろう。だが、既に死者まで出しているという事情を考えれば、あながち過剰とも言えない。

しかし、話を聞かなければ依頼も何もない。ミトンも同じ考えな

のだろう。一直線に近くの民家へと歩いていく。そして、その戸をノックした。

「誰かいるか？ 魔物退治の依頼を受けた者だが」

少しの静寂。

ミトンがやれやれと背を向けようとしたとき、その戸が開いた。現れたのは、その家の主であろう中年の男である。

「あんた……今の話は本当かい？」

「嘘をつくために、わざわざ魔物のいる村に来る奴なんているか。俺と、そいつの二人で退治してやる」

村人は驚き、交互にミトンとリユートの顔を見る。

「正気かい！？ 魔物だよ、魔物っ！ あんたみたいな若いのが、しかもたった二人でなんて」

「強さと年齢は関係ないだろう。バリプレート聖騎士団のエレヴァ・クレシアだって、それほど変わらない歳のはずだ。不安だったら、俺の力を少し見せてやってもいいぞ？」

そう言い、ミトンは剣の柄に手を掛ける。それを見て、慌てて男は口を開く。

「わ、悪かった。ちょっと驚いたもので……。村のために、わざわざ来てくれた戦士様に失礼だった。許してくれ」

分かればいい、そう言わんばかりの表情をしたミトンは、剣から手を離す。その脅迫まがいの行為を一步退いた様子で見ていたリユートは小さく溜息をつく。

ミトンとリユートは長老の家へと案内された。

長老の家は、他の家よりも一回り大きく、中には広間があった。おそらく、普段はここで村の行事などを話し合うのである。その部屋で少し待っている、七十歳を超えているであろう老人が姿を現した。威厳……とまではいれないが、老人ならではの落ち着いた雰囲気漂わせている。

老人は一礼をして席に着く。

長老の話によれば、その魔物は二、三日に一度の頻度で村に現れるらしい。今のところ時刻は決まって夜。そして、その外見は、この地方に生息する小型の狼キツズウルフのそれと同じらしい。しかし、その獰猛さは明らかに異なっているとのことだ。見れば分かる、と長老は断言した。

「狼……」

ふとリユートの口から言葉が漏れる。だが、言葉はそれ以上続かない。そのリユートをミトンは横目で見える。しかし、何か言葉を発するわけでもなく、すぐにその視線をリユートから外す。外れた視線の先、部屋の窓から見える山。それこそが狼の生息していると噂されている山であった。

■ガイタ北の山

目的の山は、ガイタ村からそう遠くは離れていない。ほんの一時間も歩けば到着できる距離だ。豊富な資源に恵まれているこの山は、ガイタ村の人々にとって生活の一部であり、整備された山道もある。その山道に久方ぶりの人影が現れる。

「現れないものだな」

そう言ってミトンは立ち止まる。そして、周囲を見渡した。同行していたリユートも同じくその足を止めた。二人が山に入ってから、既に二時間が過ぎようとしている。しかし、魔物は姿を現さない。

「夜って話ですし。昼間は隠れているのかもしれませんが」

「随分と臆病なもんだ。とはいえ、”元”はキッズウルフ。分かんなくてもいいか」

「”元”、ですか……」

「どうした？」

「……いえ」

ミトンの問いをリユートは流そうとする。しかし、言葉を言い切る前にリユートは首を横に振った。

「やっぱり、ミトンもこの魔物騒動は、獣の仕業だと思いますか？」
「それしかないだろう？ キッズウルフと聞いているんだからな」

その自信に満ちた答えにリユートは肩を落とす。今回も同じなのか。その言葉がリユートの心の中を流れる。

世間を騒がせている魔物騒動。その現場に、リユートはこれまで何度も足を運んだ。しかし、結局のところ、それらは凶暴化した”獣”によるものでしかなかった。確かに、何の武力もない人々からすれば脅威であろう。だが、”魔王”を追う人間からすると物足りない。

そのリユートを見たミトンは、やれやれと言った表情で口を開く。

「気にしているのは”魔王”か？ 正直、俺には理解できんな。俺

もこの地方の出身だ。魔王がいらないと言わん。だが、いないのであれば、それでいいだろう。こだわる必要などないはずだ」

「……いや、魔王はいます」

その言葉は、まるで呟くかのように漏れる。だが、力を感じる。それに対し、ミトンは言葉を返そうとする。

そのときだった。

ミトンの言葉を遮るかのように、近くの茂みが揺れる。リユートとミトンは、警戒しながら、その茂みを見つめる。そこに現れたのはキッズウルフだ。見たところ、おかしいところはない。おそらく魔物ではないのだろう。

「……一匹か」

ミトンは周囲を見渡す。

臆病な性格で知られるキッズウルフは群れで行動する。しかし、どうやら周囲に仲間はいないようだ。ミトンは、茂みから現れたキッズウルフに近づこうとする。それに反応したキッズウルフは、すぐに逃げ出した。そこに獰猛さはない。

「どうやら”魔物”ではなかったようだな」

「そうですね。……僕はもう戻ります。これ以上は手掛かりもなさそうですし」

先ほどの会話に気まずさを感じたのか、リユートはミトンに背を向ける。ミトンもあえて引き止めはしない。

「分かった。俺はもう少し残る」

ミトンの言葉の後、リユートは村へと足を進めた。

リユートの姿が見えなくなったことを確認し、ミトンは再び森を見渡す。先ほどの狼の気配はもうない。森に残るのは、木々の奏でる音だけである。それは静寂と言ってもいいだろう。

ミトンは静かに瞳を閉じる。全身の神経を研ぎ澄ます。手掛かりはないとリユートは言った。しかし、ミトンの考えは異なっていた。

遭遇しない狼。

群れない臆病者。

静寂の森。

ミトンにとって、それら全てが不自然に思えた。だからこそ、そこからミトンは一つの推測を導き出した。

「……これは想像以上だな」

そう呟いたミトンは、そのまま森の奥へと足を進めた。

3 プロローグは終わる

■狼の村ガイタ

「……」

リユートは空を見上げていた。その先にあるのは月である。昨日と変わらぬ大きな満月。その月をただじっと見つめていた。

「そんなに月が好きか？」

いつの間にか隣にいたミトンが声を掛ける。昨日もこんな感じだったか。リユートはある種のデジャブを感じる。

「気分を落ち着けていただけですよ」

「なるほど。心の準備は大切だからな。それで、聞いたんだろ？」

ミトンの問いにリユートは静かに頷く。

数刻前、狼の遠吠えが聞こえた。

村長の話では、魔物が現れる日には、決まってこの遠吠えがあるという。頻度が多いと聞いていたが、まさか村へ訪れた当日とは。

リユートは何気なく剣を抜く。

「気持ちを落ち着けているというより、猛る気持ちを抑えていたってところか。気合が入っているじゃないか」

「……」

そのときだった。

再び遠吠えが聞こえる。その声は大きい。先ほどよりも近づいて

いる証拠である。

リユート達は、適当な家の屋根に上る。そして、声の方角へと目を凝らした。まだ何もいない。

二人は静かに待った。緊張のためか、普段は存在すら忘れている心臓の音がはつきりと聞こえる。これから始まる命の駆け引きまでのカウントダウンだ。

「来た」

ミトンは小声でそう言った。

リユートも大地を駆け回る一つの影を確認する。その影は次第に大きくなる。そして、月明かりの下、二人はその姿をはつきりと見た。話で聞いていた通り、外見はこの地方に現れるキッズウルフのそれと同じである。しかし、この殺気は何だ？ リユートは一瞬身震いする。

そのとき、隣で剣が鞘を走る音が聞こえる。息を呑み、魔物から目を離さないようにし、リユートも自身の剣に手をかけた。

「どっちが先だ？ たかだか狼一匹。二人だと逆に難しい。一応聞いておいてやるよ」

「僕が行きます」

リユートは剣を引き抜く。そして、魔物に向かって走り出す。

その殺気に気づいた魔物は、逃げるところかリユートに襲い掛かってきた。そして、二つの影が重なる。

その直後、一方の影が崩れ落ちた。

「やるもんだな」

そう言いながら、ミトンは崩れ落ちた影に近づく。そこには魔物

が横たわっている。

「……まあ、詰めめ甘さはご愛嬌ってことにしておこうか」

次の瞬間、倒れていた魔物がミトンに飛び掛かる。

だが、ミトンは動じない。ほらな、という表情で一瞬リユートの方を見る。そして、身体を反転させ、魔物を斬り付ける。それによって魔物はその動きを止めた。

「俺も仕事をしとかないな」

そう言いながら、ミトンは再びリユートの方を向く。リユートは黙ったままミトンの方へと歩く。そして、横たわった魔物を見た。動かなくなったその姿は、もはやキッズウルフと区別がつかない。

「……」

リユートは剣についた血を静かに拭う。それは、この依頼の終わりを意味している。微かな空虚感が胸を走る。

結局、ここにも”魔物”ではなく、”獣”しかいなかった。

「そろそろ行くぞ。俺に死体を眺める趣味はないんでな」

ミトンの声がある。その言葉の通りだ。これ以上ここにいても、得られるものは何もない。リユートはミトンと共にその場を離れた。

魔物が討伐されたことを知ると、村人達は揃って大歓声を上げた。夜中だというのに祭り騒ぎ。大事に貯蔵していた食材を全て使い、村人達はご馳走を用意する。もちろん主役は二人の英雄だ。ミ

トンは相変わらずの態度。そして、リユートは少し慣れない感じで祭りに参加した。

しかし、祭りが始まって間もなく、ミトンはその姿を消した。どこかで休憩をとっているのだろう。リユートはそう思った。しかし、朝になってもミトンが帰ってくることはなかった。

朝日の差し込む部屋。

リユートは窓の外を見る。昨日とは違い、人の姿がそこにはある。祭りの後片付け、中にはまだ祭り気分の人もある。退屈な片付けのはずなのだが、村人達の表情は明るかった。心なしか、リユートの表情が緩む。しかし、リユートはすぐにミトンのことを思い出す。

出会う人々に尋ねてみた。しかし、昨夜以降、誰一人ミトンを見かけた者はいなかった。朝食の席にもいなかった。長老の家にも訪れてはいなかった。

もともと急な同行人。無理に足並みを揃える必要もないだろう。

村での挨拶を終えたリユートは、一人でガイタ村を出発した。

村が見えなくなつて、さらに少し歩いた。行きとは異なり、森林からは不気味さを感じない。木漏れ日は、その先にある晴れ渡った空の存在を証明している。微かに吹く風は心地よい。

そう感じたときだった。リユートを呼び止める声がある。その声には聞き覚えがある。リユートはその声の主の名を呼びながら、その方向を向く。

「ミトン！」

「思ったより早くてよかった。さすがに昼を過ぎれば、ここから離れるつもりだったからな」

岩陰に座り込んでいたミトンが立ち上がる。特に何も変わった様子はない。

「どうして一言もなく村から？」

「魔物は退治した。それで俺の仕事は終わりだ。本当はリユートに会うつもりもなかったのだが――」

そう言いながら、ミトンを剣を抜く。それを見たリユートは、反射的に間合いをとる。

「何の……つもりですか？」

「勘違いするな。俺達はここでお別れだ。だから、一つだけ贈り物をやろうと思っただけ」

「贈り物？」

「そうだ。リユートも抜け」

リユートはミトンの言葉の意味を理解できなかった。だが、ふざけている様子はない。自信に溢れたその表情に負けたのか、リユートはミトンの言葉に従い、剣を抜いた。

「一本勝負だ。来い」

そう言っただけ、ミトンは手招きをする。

リユートは一呼吸の後、すぐにその剣を構える。視線の先に立っているミトンはまだ剣を構えていない。だが、その余裕の表情は、その準備が完了していることを伝えるのに十分だった。

リユートが動く。一気にミトンに詰め寄り、そしてみね打ちを命中させた。

そう、それは確かに命中したはずだった。だが、次の瞬間、倒れていたのはリユートであった。

何が起きた？ それすらリユートは理解できない。

「これがお前自身の立ち位置だ」

その言葉の後、足音が聞こえる。おそらくここから立ち去るつもりだろう。だが、リユートにとってはどうしてもよくなっていた。そのリユートの耳にもう一言だけ聞こえた。

「……魔王も、大体こんなもんだ」

リユートの言葉を待つことなく、その足音は遠ざかっていった。一方のリユートはしばらくその場で空を眺めていた。木々の隙間から覗く陽光は、少年にとって眩しかった。

プロローグは幕を閉じる。この一ヶ月の後、女神伝説の伝わるこの大地で、一つの物語が幕を開く。

悪夢 — 消えた姉

『……ろさせない』

暗闇の中、その耳に声が聞こえた。

懐かしい声だ。しかし、その声にいつもの優しさはない。
ただ強い覚悟だけを感じる。

『……殺させないっ！』

微かな月明かり。

それと同時に、その目の前に一人の女性の姿が映った。
そして、その先にはこちらを向く巨大な獣の姿がある。

『リユートは殺させないっ！』

『姉さん……、姉さん！』

獣はその女性をくわえ、その場を去った。

絶叫。

月明かりの下、ただ悲しく、少年の発したその声はどこまでも響いた。

1 カルテラの噂

リユートは目を覚ました。

そこは深い森の中。鳥の声がどこからとも鳴く響き、木漏れ日は暗い森に微かな明かりを与えた。冷たい空気は清々しい。しかし、その中にありながらも、リユートの表情はその自然と対極であった。

「もう一年、か」

ふと言葉が漏れる。

リユートが見つめているのは、これから自分の進む先だ。空まで届きそうな大樹がそこにある。その大樹を見て、リユートは再び自分がこの大地に戻ってきたことを認識した。

首都バリプレートンの治める土地ビルナード。年中穏やかな気候であるこの土地は、女神伝説の残る地として世界でも有名である。そして、リユートが立っているのは、その東の境界に位置しているヴアルサという名前の大きな森である。

ミトンと別れてから一ヶ月が過ぎる。その間、リユートは一度このビルナードを離れていた。そして、自分自身をもう一度見つめ直してみた。しかし、やはりリユートの答えは変わらなかった。その気持ちを確認した後、再びこの大地に戻ってきた。

リユートは一呼吸置く。そして、静かに言葉を放った。

「魔王……必ずこの手で」

その強い気持ちを音として確認した後、リユートは大きく一步を踏み出した。

■大樹の村カルテラ

そこはカルテラという村。

大森林ヴァルサ内にあり、大樹の根元あたりに位置している。この村の象徴ともなっている大樹は、この村を訪れる旅人の目印となり、また観光の中心ともなっている。小さいながらも村は活気に溢れていた。

リユートは大樹を見る。この村を訪れるのは初めてではなく、当然この大樹を見るのも初めてではない。しかし、何度見てもその存在には圧倒される。一説では、この地方に伝わる精霊ヨークを宿しているらしい。精霊など存在するはずもないと思いながらも、この大樹を前にすると、自分の考えの方が間違いではないかと惑わされる。これはリユートだけではなく、この地を訪れる多くの観光客も同じだ。

リユートは、まず宿へ向かった。さすがに訪れる客が多いこともあり、小さな村には似つかわしい立派な宿がある。リユートは迷うことなく、その宿へ向かった。

入口まであと十メートルというところであろうか。リユートの耳に村人達の噂話が聞こえる。

「み、み、見たんだっ」

「だから、何をだよ？ もう少し落ち着けっ」

「だ、だから、幽霊屋敷だよっ！」

「幽霊屋敷？ ああ、そう言えば昨日マグの奴も言ってたか。突然建物が現れたって。本当なのか？」

「本当だともっ！ 嘘だと思うならお前も見てみるよ。西の方へ行けばすぐに分かるって！」

「ああ、分かったって。信じるって。だから、そんなに興奮するなよ。それにしてもおっかないよなあ。何かの前触れじゃないよな」

リュートの足が少し遅くなる。聞き込むほどではないが、気になる内容ではあった。だが、それ以上を聞くことなく、リュートは先へ進む。そして、目の前にある大きな宿に入った。

中に入ると、リュートと同じくらいの年頃の娘がカウンターに立っていた。胸には名札があり、そこにはアンナと書かれてあった。以前訪れたときには見ていない顔だ。おそらく新しい従業員なのだろう。

そのアンナは、満面の笑顔と明るい声でリュートに声を掛ける。

「いらつしゃいませ。一名様、お泊りですか？」

「一晩頼みます」

簡単にチェックインを済ませた後、アンナは背後の戸棚を開け、鍵を一つ取り出す。

「はい。これがお部屋の鍵です。二〇五号室。二階に上がって、左手に進んでくださいね」

一礼の後、リュートは鍵を受け取る。そのリュートをアンナは興味深そうに見つめる。

「観光……ではないですよ。その剣、もしかしてバリプレート聖騎士団への志願ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんです」

「それじゃ、もしかして魔物ハンターの方ですか？」

アンナは大きく目を開けてリュートに問い掛ける。当たりではないが、外れというわけでもない。リュートは話を合わせることにする。

「そんなところですよ」

「すごいっ！ それじゃきつと強いんですね。はあ、マグもこれくらい勇敢だったらなあ……」

「？」

「あ、いえいえこつちの話ですよ」

少し首をかしげるリユートを見て、アンナは照れ笑いをする。そして、さらに話し掛けてくる。

「最近魔物が現れているそうですね。実は、もう一人魔物ハンターの方が泊まってるんですよ。バリプレードの依頼を受けて、カミツテへ行く途中だとか」

「カミツテへ？」

リユートは思わず聞き返す。

カミツテとは、このカルテラの北西に位置する村である。この地方に伝わる女神伝説の“女神”が生まれ育った村として有名であり、今でもその女神を祭っている。首都バリプレードと並び、この地方の顔とも言える場所だ。

しかし、部外者を快く思わない民族性であり、外界との接触は極めて少ない。実はリユートも門前払いを受けた一人である。

それにしても、バリプレードからの依頼。カミツテ。魔物ハンター。意識しすぎなのだろうが、リユートの中でそれらの単語が大きく響く。

「バリプレードで何かあったんですか？」

「私も詳しくは知らないんですけどね。亡霊騒ぎですって」

亡霊？ と、リユートは首をかしげる。魔物騒ぎならよく耳にす

る。だが、亡霊というのはリユートにとって初耳だった。その亡霊を抑えるために、女神様の力を借りるというわけか。まるで祈禱師のようだ。

そのとき、リユートは宿の外で耳に入れた噂話を思い出す。

「そういえば、さつき外で幽霊屋敷がどうのつて話を聞いたんですけど」

「え？ ああ、さてはマグね。もう、仕方ないわね」

また出たマグの名前にアンナは小さな溜息を付くが、再び笑顔に戻る。よほどのマグには頭を悩まされているのだろう。

「バリプレート」の亡霊騒ぎとは別の話です。昨日か一昨日あたりらしいんですけど、森の中に突然建物が現れたらしいんですよ。すごく古い建物らしくて、中に人の気配もない。だから、幽霊屋敷なんですって」

「そうですか。バリプレート」の亡霊といい、最近はこんな話が流行っているんですか？」

アンナは慌てて首を振る。

「とんでもありません。バリプレート」の方は分かりませんが、うちのはただの勘違いだと思います。普段は人が歩かないような場所って聞いてますし」

普段は歩かないような場所であれば、たまたま昔の建物が見つかっただけでも考えられる。しかし、それだけで騒ぎ出したりするものだろうか。表で見た人物の様子をリユートは思い出す。かなり興奮していたのを覚えている。

「その建物のある場所を教えてください。少し見てみたいんです」

「本気ですか？」

「少し気になります。もしかしたら、何か魔物がいるかもしれません」

男の人はみんなこうなのか、といったアンナの表情。声には出さないが、何となくリユートにはそう伝わった。しかし、リユートは気にしない。魔王への手がかり、その可能性があるのだ。

アンナから場所を聞いた後、リユートは二〇五室に入った。しかし、荷物を置いただけ。部屋を構成する木々の香りを感じる暇もなく、リユートはすぐに部屋を出た。

目指す場所は、もちろん幽霊屋敷だ。

急ぎ足のリユートは、カウンターのアンナの見送りを受け、そのまま宿を出た。

2 護って欲しいと少女は言った

■精霊の棲む森ヴァルサ

暗い森は静寂に包まれている。しかし、そこに不気味さはない。優しい森の香りは、むしろ安らぎを感じさせる。

その森の中をリユートは一人進んでいた。時折現れる獣達を追い払いながら、既にカルテラから一時間ほど歩いただろうか。アンナから聞いた情報を頼りに、リユートは幽霊屋敷を探していた。

しかし、広大な森の中、しかも一般道から外れた場所である。幽霊屋敷はなかなか見つからない。

一度戻るべきか、とリユートは考える。そして、手元の地図を見た。アンナの付けた印が目立っている。それほど距離はない。しかし、よくよく考えれば、アンナの情報もまた人からの噂だ。正確な位置をアンナが知っていたわけではない。

リユートは溜息をつく。もう少し探したら、一旦戻ろう。そう決めたリユートは、さらに森の奥へと進んだ。

『――』

ふと何かが聞こえた気がする。

それは声のように感じる。男か女かも分からない。ただ何故かその方角は分かった。リユートは迷うことなく、足を進める。

しばらく歩いた。すると、その目の前に一軒の屋敷が姿を現す。おそらく、これが幽霊屋敷だ。

噂の通り、建物はかなり古風である。少なくとも現代のカルテラの文化とは異なっている。しかし、不思議とそれほど老朽化は感じられない。

リユートは建物の玄関に立ち、扉に手を掛ける。扉に鍵はかかっておらず、リユートは建物の中に入れた。

■幽霊屋敷

二階建ての屋敷はそれほど広いものではなかった。

生活するにはさっぱりとしており、誰かの別荘、そんな雰囲気漂浮させるものであった。窓から適度な明かりが入っており、内部はそれほど暗くはない。幽霊屋敷というには少し物足りなくくらいである。

ただ、人の気配はなく、床のきしむ音は孤独を実感させるのに十分であった。もともと、それに慣れたリユートにとっては、特に気になるものではないが。

一階を探索し終えたリユートは、建物の二階へと上がる。いくつかの部屋がある。ひとまず、リユートは手前の部屋のドアを開けようとする。

『——』

再びリユートの耳に何かが聞こえた気がする。この奥……なのか？ 一瞬、リユートに緊張が走る。呼吸が止まり、心臓の音が強く響く。

覚悟を決め、リユートはドアを開く。ドアの音は静かに、しかし確かに響きわたり、それが緊張を一層引き立てる。リユートは部屋の中へと一步を踏み出す。無意識のうちに、片手は剣の柄を握り締めていた。

周囲を見渡す。特に変わったものはない——いや。

リユートはゆっくりと歩く。その目の前にあるのは小さな円卓だ。そして、その上には位牌が一つ置かれていた。幽霊屋敷らしいと言

えばそうである。先ほどの”声”は、これが元凶なのか？

リユートは位牌を手に取る。何か書かれている。リユートはそれを音にする。

「ミゼファン……オン………カリィスペルク………ネーゼシア
ン………」

やや長いが、おそらくそれは人の名前だ。この屋敷の主——そう
思うと、リユートはふと寂しさのようなものを感じた。そこに感じ
られた孤独は、どこか近しくもある。リユートは黙ったまま位牌を
置く。そして、少し目を閉じる。

静かな黙祷。

それは位牌の主へか。それとも自分のためか。リユートはただ黙
祷した。そのときだった。リユートは何か違和感を感じる。

「（これは……光？）」

リユートはゆっくりと目を開く。

光の主は先ほどの位牌である。リユートは位牌から目を離すこと
なく、ゆっくりと距離を置く。そして、一瞬光が強まった。その眩
しさにリユートの脳は、その目を閉じることを命令した。

光が収まる。

リユートは再び、先ほどよりもゆっくりと目を開く。その直後、
リユートは目の前の光景に驚く。

そこには、一人の少女が立っていた。

「（幽霊か？）」

それが最初の印象であった。

幽霊屋敷と呼ばれた場所で、その少女は突然目の前に現れた。当

然といえば当然の印象であらう。

年齢はリユートと同じくらいであらうか。整った顔立ちをしているものの、その表情はどこか弱い。透き通るような白い肌や、飾り気のない服装は、さらにその弱さを強調させていた。しかし、その瞳だけは、少女の容貌に対して異端であつた。

強い威圧を与えるような金色の瞳。それは強く印象的であつた。

「……」

少女は何も喋らず、ゆつくりと周囲を見渡した。何かを確認しているかのようなのである。一瞬リユートと目を合わせ、今度は静かに瞳を閉じる。胸に手を当てている。まるで心臓の音を確認しているかのようなのである。

その間、リユートは動けない。口を動かすことすらできなかった。しばらくすると、少女はその瞳を開く。再び現れた金色の瞳は、今度は、はっきりとリユートを捕らえていた。

少女は動かない。まだ何かを考えているようだ。

その静寂に耐えきれなくなり、ついにリユートがその沈黙を破る。

「君は……その位牌の？」

「……はい」

少女が返事をした。

見た目の印象通りの弱弱しい声。その透き通るような細い声は、少し賑やかな町中ではまず聞き取れないであらう。

リユートは質問を続ける。

「幽霊……なのか？」

「いえ……」

否定した少女は少し俯く。やはり何かを考えているようである。幽霊ではない、か。この状況でそれを信じろというのも難しい。しかし、やや緊張状態にあるリユートは、その言葉の真実を考えるまで至らず、ただ少女の言葉を受け入れた。再び静寂が訪れ、今度は少女がそれを破る。

「あの……」

そこで一瞬言葉は止まる。リユートはただ静かに次の言葉を待つ。

「あなたは……私を護ってくださいか？」

「！？」

その言葉は唐突で、リユートに戸惑いを与える。一方の少女は黙ってリユートを見つめたままである。

リユートは少し考え込む。

少女の言葉の意図は分らない。また、分かったところで、リユートには、“魔王”という目的がある。正直、この少女の願いを受け入れている余裕などない。そもそも、目の前の少女は、か弱い容姿をしてはいるものの、位牌から現れているのである。その素性は極めて怪しい。

しかし、リユートの頭の中である声が重なった。

『リユートが私を護ってよ』

それは、とても懐かしく、そして忘れることのできない声であった。

握る拳は強くなり、そしてリユートは少女を見る。

その金色の瞳は、まっすぐとリユートを捕らえたままである。

「……君を護る」

短い言葉。

それは自然にリユートの口から出ていた。不思議と迷いはない。ただ、自然に少女を言葉を受け入れられた。

「！ありがとうございます」

少女の表情が少し明るくなった——気がする。その少女はリユートの方へゆっくりと近づいてくる。目の前まで近づいてきた少女に対し、リユートは口を開く。

「僕はリユート。君の名前は？」

「ネーゼシアンです。……ネーゼと、呼ばれていました」

（ミゼファン・オン・カリィスペルク・ネーゼシアン）

幽霊とも思えるその少女は、位牌に刻まれた名前を名乗った。

リユートは手を差し出す。その手に少女の手が触れたとき、リユートは初めてその手に温もりがあることを知った。

3 カミツテの鏡

■ 大樹の村カルテラ

幽霊屋敷から一時間ほど歩き、リユート達はカルテラに戻っていた。道中で何度か獣を追い払う場面はあったものの、大樹のおかげで迷うこともなく無事に戻ることができた。

意外だったのはネーゼだ。道中で、リユートは何度かネーゼに気遣いの言葉をかけた。しかし、その道中でネーゼが疲れる素振りを見せることは一度もなかった。

幽霊屋敷で出会った少女。

その素性は分からない。考えるまでもなく、謎に満ち溢れた存在だ。とはいえ、護ると約束した手前、これからしばらくはリユートと一緒にいることになる。これからの話も必要だ。

「ネーゼ、どこかで休まないか？ 今後の話もしておきたいし。それに、何か食べたくないか？」

「え……と。お願いします」

相変わらずの弱々しい返事だ。しかし、どうやら食事はとるようである。やはり幽霊というわけではないのだろう。

リユートはふと自分の手を見る。幽霊屋敷で触れたネーゼの手には、確かに温りがあった。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「はい」

「では、こちらの席へどうぞ」

店員は手際よくリユート達を誘導する。案内された席には大きな窓があり、その先には大樹が見える。カルテラで一番人気の店。その店内で、特に景色のよく見えるいい席だ。

壁に掛けられた時計を見ると、既に十五時を回っている。昼には遅い時間のためなのか、人気店の中は空いていた。何人かの先客達は、お茶と共に自身の時間を楽しんでいる。これであれば、ゆっくりと話をしたところで店の迷惑にもならないだろう。

席についたリユート達に店員がメニューを差し出す。

「ネーゼ、好きなものを選んでいいよ」

その言葉と同時に、リユートはネーゼにメニューを差し出す。ネーゼは促されるままにメニュー受け取り、それを開く。そして、まるで物珍しいものでも見るかのように、ゆっくりとページをめくった。

「あ、あの……このサンドイッチと、それとミルクティーをお願いしてもいいですか？」

「それだけでいいのか？」

「はい」

「そうか。じゃ、それをお願いします。そうだな……僕はこの定食を。あとお冷も」

「かしこまりました」

店員は明るい声を出しながら注文をメモし、そのまま厨房へと向かう。そして、二人の間にしばらくの時間が訪れる。

「これからのことを聞いてもいいかな？」

「はい。お願いします……リユートさん」

「リユート、でいいよ。そっちの方が僕も楽だから」
「はい……リユート」

ネーゼはぎこちない返事を返す。それも仕方ないだろう。護ると約束したとはいえ、まだ出会ったばかりなのだ。お互いのことなんてほとんど知らない。不安なことも多いだろう。

リユートは話を続ける。

「それで、とりあえず僕は何からネーゼを護ればいいんだ？ 何かに狙われていたりするの？」

「いえ……その……」

ネーゼは口籠る。話せないというよりは、言葉を探しているようである。急ぐ必要はない。リユートはゆっくりと言葉を待つ。

しばらく考えた後、ネーゼは口を開く。

「行きたい場所があります。そこまで連れて行って欲しい……です」

行きたい場所。つまりは道中のボディガードということなのだろう。確かに、女の子の一人旅というのは何かと不安なものだ。しかし、たったそれだけを言うのに、どうしてそこまで迷う必要があるのか。

さらなる疑問を感じながらも、リユートは話を進める。

「分かった。それで、どこまで連れて行けばいいんだ？」

「はい……」

返事と同時に、ネーゼは一度視線を落とす。そして、ゆっくりと再びリユートの方を見た。

リユートは黙ってネーゼの言葉を待つ。

「鏡……」

戸惑いながら、ネーゼはその言葉を出す。しかし、何かを決心したのか、ネーゼは言葉を続けた。

「鏡の場所へ連れて行ってください」

そこまで言いきつた後、ネーゼは目を閉じ、そして俯いた。少し震えているのが分かる。

一方のリユートは首をかしげる。鏡など珍しいものではない。当然この店にもあるし、少し小洒落た店へ行けば、女の子向けの手鏡だって売っている。だが、そういう意味ではないのだろう。ネーゼの様子を見れば、それくらいはリユートにも理解できる。

特別な鏡、あるいは鏡という名をした地名かもしれない。いずれにしても、リユートには全く見当がつかない。

「ネーゼ、顔を上げてくれないか？ 僕にはよく分からないんだけど、鏡つてのは何のことなんだ？」

「その……カミツテの鏡……です」

カミツテの鏡？ と、その単語が頭を流れたところで、リユートはあることを思い出す。ネーゼの持つ金色の瞳。これは女神発祥の村と呼ばれるカミツテの象徴だ。世界広しといえども、これを持つのはカミツテの民だけと言われている。

カミツテの民となれば、幽霊屋敷の位牌の件も何となく説明がつきそうだ。カミツテの民には、“カミツテの奇跡”と呼ばれる不思議な力が宿っていると聞く。何でも、あらゆる怪我、病気を治癒することができるらしい。

そんな不思議な力を持っているのだ。位牌から現れるくらいのこ

とも不可能ではないだろう。その理由までは分からないが、おそらく儀式か何かなのだろう。

と、今はどうでもいい話だ。リユートは思考を”鏡”に戻す。もし、その鏡がカミツテにあるのであれば、カミツテへ行きたいと言わずだ。あえて”鏡の場所”と言うからには、カミツテとは異なる場所にあるのだろう。その在り処すら分からない可能性もある。

「ごめん。僕はその鏡を知らないんだ。それはどこにあるんだ？」

「それは……その……分かりません」

リユートの予想通りだった。

所在の分からない鏡を探すとなれば、かなり骨が折れる。せめて手掛かりくらい欲しいと考え、リユートはさらに尋ねる。

「カミツテでも分からないか？」

ネーゼは黙り込む。

これは困った。そうリユートが思ったときだった。ネーゼがもう一度口を開く。

「あの、カミツテの場所はご存知なのですか？」

「カミツテ？ ああ、それなら大丈夫だ。ちょうどこの近く……たぶん馬車で数日もあれば着くかな」

「お願いします。カミツテまで連れて行ってください。カミツテへ行けばきっと——」

手掛かりはカミツテか。

行方知れずのカミツテの鏡を探すためにカミツテへ行く、ということにリユートは少し釈然としないものを感じる。それでも、何も手掛かりがないよりはいい。

それに、カミツテというのは、リユートにとっても悪い行き先ではない。女神発祥の地であれば、魔王の手掛かりについても期待できる。以前は門前払いを受けたが、今回は同胞が一緒なのだ。その心配もないだろう。

リユートはネーゼの方を見る。ネーゼは真剣な瞳でリユートを見つめている。

ひとまず、次の行き先は決まった。

「分かった。カミツテへ行こう」

リユートがそう言ったときだった。店の奥から注文を持った店員が二人の席までやってきた。

4 孤独を恐れる孤独な少女

食事を終えて、リユートとネーゼは宿へ向かって歩いていた。その道中で、二人はカルテラという村に触れることになる。幽霊屋敷の噂はあるものの、この村はいたって平和だ。

リユートはネーゼの様子を見てみる。ネーゼは物珍しそうに村の様子を眺めていた。

あの幽霊屋敷の中にいたのだ。それでも閉鎖的なカミツテの民。もしかすると外の世界など見たことがなく、見るもの全てが珍しいのかもしれない。これから一緒に行動することを思えば、もう少し打ち解けていた方がいいだろう。そう考えたリユートは、ネーゼを連れて村を見て回ることにした。

見るものにネーゼは驚きを見せる。その姿を見て、リユートはまるでこれが観光であるかのように錯覚する。いつ以来だろう。こんな気分になるのは。

しばらく村を見て回り、二人は宿の近くまで来ていた。その宿はもう目の前に見える。

そのとき、ネーゼの足が突然止まる。それに気づいたリユートは、ネーゼの方を振り向く。

「どうしたんだ、ネーゼ？ もう少しで今日泊まる宿だけど」

「あの……いえ……」

ネーゼはその場に座り込む。それを見たリユートは慌ててしゃがむ。そして、すぐにネーゼの顔色を確認した。

「ネーゼ、大丈夫か！？ どこか具合が悪いのか！？」

リユートはネーゼの肩に手を触れる。今にも折れてしまいそうなその肩は、少し震えていた。リユートは少し後悔する。やはり疲労を隠していたのか。こんなことなら、早く宿で休ませるべきだったが、不幸中の幸い、その宿は目の前である。リユートは立ち上がる。

「待つてくれ。すぐに誰かを呼んでくる——」

リユートはネーゼから離れようとする。しかし、リユートは何かに引っ張られるのを感じた。振り返ると、震えながらも、しっかりとリユートの服を掴むネーゼの姿があった。

「お願いです。一人は……嫌です」

「だけど——」

「お願いです……」

辛さと必死さの入り混じったような表情で、ネーゼは小さく声を絞り出した。それは優柔不断な少年の動きを止める。

すぐ目の前にある宿に入れば、おそらく店員のアンナがいるはずだ。どう考えても、すぐに宿へ向かった方がいい。しかし、そう考えながらも、リユートはその場を動くことができなかった。

困ったリユートは辺りを見渡す。人影はない——いや、ちょうど宿から出ようとする二つの影が見えた。

一人はアンナだ。もう一人は腰に長剣を携えた青年である。おそらく、宿に宿泊していた”もう一人の魔物ハンター”なのであろう。しかし、その服装にはやや洒落っ気があり、そこからは魔物との戦いなど想像できない。

「それじゃ、ありがと」

「はい、お気をつけてください。また来てくださいね」

「いや、アンナちゃんみたいなかawaii子に、またって言われたら断れないよ。商売上手なんだから。また来るよ。さてと。ん？」

その青年がリユート達に気づく。その目には、震える少女とその介抱をする少年が映る。事態に気づいた青年は、急いでリユート達の方へ駆け寄る。アンナもそれに続く。

「その子、大丈夫？」

「体調が悪いようでしたら、どうぞ中へ。ベッドもお貸しできますので」

助かった、とリユートは思う。

一方のネーゼはまだ震えている。震えながらも、その手は強くリユートの服を握り締めたままだ。心なしか、リユートはその力が先ほどよりも強くなっているように感じた。

「大丈夫だ。すぐに休める」

「私……まだ……」

そのとき、その様子を見ていた青年が動いた。

「何かやばそうだし、とりあえず俺は医者を呼んでくるよ。確か、すぐそこだったはず。二人はその子をベッドに寝かせておいて」

そう言い残して、青年は医者のところへと走り出した。一方のリユートとアンナは、ネーゼを宿の中へと運んだ。

宿へと入り、アンナがカウンターのすぐ横にあるドアを開く。その先の簡素な部屋は、おそらく従業員用の休憩室なのだろう。アンナは急いでベッドの用意をして、ネーゼを寝かしつけた。横になつて楽になったのか、ネーゼは先ほどよりも落ち着いているように見

える。

しばらくして、先ほどの青年が医者連れて現れる。

「異常はありませんね。ただの疲労かと思います。今日はゆっくりと休ませてあげてください。何かあれば、またお呼びください。今日は診療所にいますので」

「ありがとうございます」

そのまま医者は部屋を出る。見送りのため、アンナもその後が続いた。医者連れて来た青年は、いつの間にかいなくなっている。残されたリユートはネーゼを見る。ネーゼはいつの間にか眠っていた。よほど疲れていたのだろう。やはり早めに休ませるべきだった。そう思ったとき、ネーゼのうわ言が聞こえた。

「一人は……嫌です……」

暗い闇。

そこにあるのは大きな鏡。

その鏡は闇を映し続ける。

その前に白い光が現れる。

そして、その光は少女を装い鏡を見つめる。

しかし、鏡は少女を拒み、その姿を映さない。

少女は独り、静かに立つ。

「……？」

ネーゼは目を覚ます。その視線の先にあるのは、見覚えのない天井である。ネーゼはゆっくりと周りを見てみる。やはり、そこはネーゼにとって見覚えのない部屋であった。

不思議に思ったネーゼは、ゆっくりと身体を起こす。気づけば、寝巻き姿になっている。

ネーゼは今の状況について考えてみる。しかし、何一つ思い出すことができない。

さらに考えようとしたところで、部屋のドアが開く。そして、ネーゼにとって見知らぬ少女アンナが入ってきた。

「よかった、気がつきましたか」

「あの……ここは……？」

「ここは、カルテラが誇る宿フォレストナイトよ。なんてね。でも本当によかったです。心配しましたよ。あ、すぐにリユートさんも呼んできますね」

「カルテラ……？ リユート……？」

部屋から出るアンナを見ながら、ネーゼは意識を失う前のことを少し思い出した。

ネーゼは、もう一度だけ周りを見てみる。目に映るのは、よく手入れされた簡素な部屋。ただそれだけである。それを確認した後、ネーゼは大きく息を吐いた。

しばらくして、リユートを連れたアンナが再び部屋に入ってくる。ネーゼの様子を見て、リユートの表情は緊張から安堵に変わる。

「ネーゼ、大丈夫そうではあった。だけど、まだ無理はしない方がいい」

ネーゼは促されるまま横になる。しかし、眠るのは怖かった。夢を見るのが怖かった。そこにある孤独が怖かった。

ネーゼは、目の前に座っているリユートの服をそつと掴む。

「どうしたんだ？」

リユートの言葉に、ネーゼは返事を返せなかった。震えているわけではない。しかし、その不安が伝わったのか、リユートは静かにその場に座り込む。

「大丈夫。しばらくここにいろよ」

その言葉を聞いて、ネーゼの心は少しだけ落ち着いた。しかし、まだ不安が消えたわけではない。

孤独な少女は鏡を求め、その鏡は少女を拒んだ。それは、ただの夢ではなく、少女にとっての現実であった。

それを知る少女は、何も知らない少年の服を強く握り締めた。強く――。

5 ヨークの石碑

カルテラ特産の芋を主食とし、野菜サラダとスープを付けた素朴な朝食がテーブルに並ぶ。それをリユートは口にする。その隣にはネーゼの姿もある。食堂まで来れたことを考えると、体調の方はかなり回復しているようだ。しかし、目を覚ましてからまだ一日しか経っていない。油断しない方がいいだろう。

幸い、宿側の親切により、ネーゼが回復するまで無料で部屋を貸してくれることになった。アンナが言うには、これがカルテラの良らしい。

そのアンナが飲み物を持って現れる。

「飲み物のおかわりはいかがですか？」

「ありがとうございます。ネーゼは？」

「私もお願いします」

「はい。ネーゼさんも元気になってよかったですね」

そう言いながら、アンナは二人のカップに飲み物を注ぐ。

「心配を掛けました」

「いえいえ。でも、カミツテの民でも倒れたりするんですね」

「いや、あれは僕のせいです。ネーゼが疲れているのに気づかず、あちこち連れ回って。次からはもっと注意します」

「優しいですね。本当に出会ったばかりなんですか？ うちの……
……つとこっちはいいか」

本当にどうでもいい。リユートはあえて何も触れない。そのとき、リユートは”ある青年”のことを思い出す。

「そういえば、あの人は？ 医者を呼んでくれた——」

「ああ、カープさんですね。一昨日に話した魔物ハンターの方ですよ。うちの常連さんで、よく大樹を見に来るんですって。あの日は、早々と出て行きました」

「そうですか。お礼くらい言いたかったですけど」

「そろそろ出発しないと、依頼主から怒られるんですって」

そう言いながら、アンナは笑う。

そういえば、そのカープという青年の依頼主はバリプレートだ。ネーゼの一件ですっかり忘れていたが、バリプレートでは亡霊騒ぎが起きている。魔王、当然その可能性もあるが――。

リユートはネーゼの方を見る。ネーゼは黙ったままスープを口に運んでいる。食事といっても、先ほどからスープくらいしか口にしていない。まだ体調の方は万全でなさそうだ。

ひとまず焦る理由はない。そう考えたリユートは食事に戻る。亡霊騒ぎといっても、おそらくこれまでと同じく、意味のない”魔物”退治で終わるだけだ。

「あ、そうだ」

不意にアンナが軽く手を叩く。何かを思い付いたらしい。実に分かりやすい性格だ。

「大樹の根元に精霊ヨークを祀った石碑があるんです」

「それなら知っています。有名な観光スポットらしいですね」

「はい。カルテラの自慢です。私も好きな場所で、あそこに行くと不思議と気持ちが悪くなくすよね。ネーゼさんにもいいかもしれませんよ。宿からの馬車もありますし」

ヨークの石碑といえば、人の心を安らげることで有名だ。ただの

迷信と考え、リユートはこれまで訪れたことなどなかった。この機会に行ってみるのも悪くはないだろう。

だが、やはりネーゼの体調が気になる。リユートはネーゼの方を見る。そのリユートの気持ちを感じたのだろう。ネーゼは頷きながら答える。

「私は行ってみたいです」

「でしょ？　これで決まりですね、リユートさん」

ネーゼの返事にすかさずアンナが反応する。こうなると断つても無駄だろう。

アンナの性格のためだろうが、随分と打ち解けてしまったようだ。

■大樹ヨーク

「わあ……」

そう声を漏らすネーゼの頭上には、天を覆い尽くすかのように大樹が広がっている。樹齢千年を超えるらしい。もし、千年前に魔王アティラスが実在したというのであれば、この樹はその歴史をも見ていたのだろう。

「皆さん驚くんですよ。さあ、石碑はすぐそこですよ」

そう言うのはアンナだ。

案内役としてリユート達について来たのだ。宿の方は交代制らしく、休憩扱いとなっている。というより、ネーゼの一件で、ずっと働き詰めであったアンナに対する宿側の配慮だったのだろう。

アンナに案内され、リユート達は石碑の目の前まで辿り着く。運

よく、他に観光客はいないようだ。

リユート達は石碑の前に立つ。大樹との対比のためか、石碑は小さく映った。そこに刻まれている文字の意味は分からない。

それにしても不思議な気分だ。空が大樹に隠されているにも関わらず、この場所はまるで太陽の光を浴びたみたいに温かい。これが精霊の力だというのであろうか。

「ネーゼさん、こっちへ」

「？」

アンナがネーゼの手を引く。不思議に思ったリユートは尋ねる。

「どうしたんですか？」

「あ、リユートさんは駄目ですよ。これは女の子だけの儀式です」

「儀式？」

「ふふ、そうです」

詳しいことは秘密らしい。二人は大樹の反対側へと向かう。仕方なく、リユートはもう一度石碑を見る——そのときだった。

「くすくす」

女性の笑い声が聞こえる。リユートは声のする方を見る。

大樹の根元、そこに一人の女性が座っていた。その女性はリユートに向かって小さく手を振る。

「ごめんなさいね。あまりに微笑ましくて。若いつていいわね」

優しい声を出しながら、その女性が近づいてくる。

リユートより年上に見るが、それでもおそらくまだ二十代だ。ど

こか神秘的で、知的な雰囲気を漂わせている。
女性は優しくリユートに微笑む。

「私はリーネア。旅行が趣味で、世界中を見て回っているの。よろしければ、あなたの名前を聞いてもいいかしら？」

「僕はリユートです」

「そう。綺麗な名前ね。この地方で言うと、かつてアズトーサ王に仕えた詩人と同じ名前よ。詩は好きかしら？」

「いえ、詩はちよつと……」

「それは残念」

リーネアは微笑みを浮かべたまま、石碑の方を見る。

「知っているかしら？ この石碑が祀る精霊の名前はヨーク。精霊の中でも、特に信仰の強い四大精霊の一角よ」

「もちろんです。大樹に宿り、人々に恵みを与える、ですよね？」

「その通りよ。とはいえ、精霊の存在なんて、多くの人は半信半疑これだけ信仰が強いのに不思議なものね。私は信じているんだけどな」

「精霊をですか？」

「おかしいでしょ？ でも、この場所に立つと、いつもそう思うの。だって、心が安らぐもの」

そう言いながら、リーネアは両手を広げる。

そのリーネアに陽光が降り注ぐ。神秘的な光に照らされたその姿は美しかった。伝説の”女神”が存在するといふのであれば、こんな感じなのであろうか。

そのとき、リユートはふと思う。このリーネアであれば、魔王について笑わず聞いてくれるのではないか。むしろ手掛かりを知っている、そんな期待すら感じさせる。

「精霊を信じているってことは、もしかして魔王の噂も信じていたりしますか？」

「魔王？ それはまた神秘的ね。そうね……」

リーネアは、大樹から零れた光を手ですくう。

「魔王はこの光と同じ」

「どういうことです？」

「掴もうとしても掴めず、ただ幻のよう。真実であり、同時に偽りでもある。魔王は、魔王を信じる者の前にだけ現れるものよ」

その言葉の意味はよく分からなかった。

詩的な言葉からは、ただのロマンティストの一人として信じているだけのようにも感じられる。しかし、どうしてだろうか。リーネアの言葉には力を感じた。言葉そのものではない。空気、といえば正しいのだろうか。

考え込むリユートに対し、リーネアはさらに言葉を続ける。

「あなたは信じているのかしら？」

「……はい」

「ふふ、正直ね。でも、笑われるから内緒にした方がいいわよ。そんなことを信じる人なんて魔王信仰者くらいなんだから。もしかしてそうなのかしら？」

「いえ……」

「そう思ったわ。さ、考えるのは終わり」

そう言って、リーネアはその両手を軽く叩く。

「魔王もいいけど、今の彼女を大切にしなさい。これは、お姉さん

からのアドバイスよ。ヨークが人々にもたらすもの、恵みの他にも一つあるのよ？」

「何ですか？」

「恋愛よ。女の子にとっては大切なこと。じゃあね。ヨークの儀式ならそろそろ終わるわ。邪魔者は消えるわね」

リーネアはそのまま大樹から遠ざかるように歩いていった。

自由気まま、まさにその言葉がぴったりと似合う。あんな風に自由に生きられたらどれだけ幸せなのだろうか。いや……それは自分には許されない。そう考えたリユートは小さく頭を振る。

そのとき、ネーゼとアンナが戻ってくる。ぱつと見たところ、何も変わりはない。

「お待たせしました」

「儀式はもういいのですか？」

「はい。ほら、これを見てください」

そう言つて、アンナはネーゼの左腕を手取る。よく見ると、何かが身に付けられていた。

「これはミサンガ？ 切れたときに願いが叶うというやつですよ？」

「はい。でも、このミサンガは少し違うんです。このミサンガ自体に願いはかけませんから」

「じゃあ、どういうミサンガなんですか？」

そう尋ねると、アンナは得意げに説明を始める。

「”儀式”を終えたミサンガには精霊ヨークの力が宿っています。その力で、女の子に少しずつ奇跡を与えてくれるんです。そして、

女の子に本当の幸せが訪れたとき、ミサンガはその役割を終えて切れるんです」

つまりは、この精霊ヨークを絡めたミサンガというわけか。根本は何も変わっていないように思えるが、このカルテラでは大人気のアイテムらしい。それを身に付けたネーゼは、不思議そうにそのミサンガを見ている。

その姿を見て、リユートは思う。

その少女にとつての幸せとは一体何なのだろうか？

幽霊屋敷で出会った少女は鏡を求めた。それと同時に孤独を恐れた。それは、幸せとは程遠い感情。”鏡”を得たところで、それでも幸せには届くとは思えない。

しかし、それはリユートにとつても同じこと。魔王を求める少年の幸せとは、一体何なのだろうか――。

悪夢 — 緋い道

月明かりが照らす草原で、その影はたったひとりだった。

影はゆっくり、ゆっくりと歩いていく。その行く先には、途切れ途切れの緋い道が続いていた。

『きつと……きつとこの先に……』

影は呟く。

それは無意識のうちに。まるで何かにとり憑かれたかのように。おぼつかない足取りで、ただ大地に続く緋い道を一步一步辿っていた。

『必ず……必ず助けるから……』

その道の果てはまだ見えず、緋い道はどこまでも続いていた。しかし、影はその果てがあると信じて進み続けた。

1 カーブ・リトアレイ

■ 大樹の村カルテラ

「リユートさん、ネーゼさん。また来てくださいね」

そう言つて、アンナはリユートとネーゼに満面の笑みを見せる。そのアンナを前にして、リユートは少し名残惜しさを感じる。少し不思議な気分だった。

リユートの隣に立つネーゼの体調はすっかり回復し、二人はこれからカルテラを出発する。

アンナとの挨拶を済ませ、リユート達は背後で待っている馬車に乗り込む。他に乗客はなく、二人が席に座ったところで馬車はゆつくりと動き始めた。

窓から外を見ると、アンナがまだ手を振っている。二人は手を振り返す。そして、いつしかアンナも見えなくなった。

■ 精霊の棲む森ヴァルサ

馬車の向かう先はビラナという町だ。カルテラから馬車で南へ半日といったところに位置し、二人の目的地であるカミツテとは反対方向となる。

直接カミツテへ向かう選択肢もあったが、カルテラからだ馬車でも数日は必要となる。さすがに女の子を連れた旅で、何の準備もないというのは心もとない。その点、ビラナは商業都市として栄えている。これからの旅の準備を考えても、立ち寄っておいて損はない。もちろん、これらのほとんどはアンナの提案だが。

馬車に揺られながら少し経つ。

リユートはネーゼのことを尋ねていた。既知ではあるが、ネーゼの出身はカミツテである。しかし、どうやら幼い頃に少し住んでいただけらしい。父親の仕事の都合でカミツテの外で長く暮らしていたため、おそらくカミツテへ行っても誰もネーゼを覚えていないだろうという話だ。排他的なカミツテの民からすると珍しい境遇、とリユートは思った。

そのネーゼが”カミツテの鏡”を探している。これはリユートにとって不思議であった。しかし、ネーゼはこの理由について語らない。幽霊屋敷にいた理由に関係しているのだろうか？　もしかすると魔王と……。

そこまで考えたところで、リユートは一人静かに首を振る。ネーゼに疑問があるとはいえ、そこに魔王と関連付ける根拠などない。むしろ強引過ぎる思考だ。

そう自覚したリユートは、気分を落ち着けようと馬車の外を見る。鬱蒼とした木々しか見えない。まだ森の中だ。

！

不意に馬車が大きく揺れる。次の瞬間、馬車はその歩みを止めた。

「どうしたんですか？」

「お、狼です」

「狼……？」

リユートは窓から外を見る。運転手から聞いた通り、そこには多くの狼の姿があった。いずれもヴァルサの森に生息するキッズウル

フだ。しかし、様子がおかしい。

運転手は馬車の中に逃げ込む。それと入れ替わるかのように、リユートは馬車の外へと飛び出す。その手には、鞘から抜かれた剣が握られている。

リユートの脳裏に、一ヶ月前の狼退治の光景が浮かぶ。あの日はたった一匹だったが、今回は五、六匹いる。

「（やるしかない）」

息を呑み、そう覚悟した瞬間だった。狼の一匹がリユートに襲い掛かる。リユートはそれを剣でなぎ払う。なぎ払われた狼は、すぐにその身を反転させる。そして、再びリユートの方を向く。

一筋縄ではいきそうにない。

「リユート……！」

「駄目だっ！」

心配だったのか、ネーゼが馬車から顔を出そうとする。しかし、リユートはそれを止める。当然だ。いつ標的になるかも分からない。とはいえ、この状況を乗り切れなければ同じことになる。方策を考える余裕なんてない。今は一匹でも多く倒すしかない。そう直感したリユートは呼吸を整える。

！

それはリユートの背後からだった。不意に狼の一匹が絶叫を上げる。反射的にリユートは背後を振り向く。そこには見覚えのある青年が立っていた。

「やあ、また会ったね」

狼達の警戒を浴びる中、その青年はリユートに笑い掛ける。

「確か、医者を呼んでくれた——」

リユートがそこまで言ったところで、青年はその言葉を止めるように手でサインする。

「話は後。ひとまずこの状況を何とかしようよ」

その言葉と同時に青年は剣を構える。リユートは小さく頷いた後、同じく剣を構えた。

ほんの数分程度だろう。青年の協力もあり、無事に狼達を追い払えた。一息ついたリユートは、青年の方を向く。

「助かりました。この間もネーゼの件で助けてもらいましたし、本当にありがとうございます」

「別にいいって。そのネーゼ……って、あの女の子のこと？ 元気になってくれた？」

「おかげさまで」

「よかった。心配だったんだよ」

青年は胸を撫で下ろす仕草を見せる。

「本当は俺も付き添ってあげたかったんだけど、急ぎ旅の途中だったからさ。って、傷薬を買い忘れて、後戻りしている俺がここにいるんだけどね。あ、そういえば、自己紹介していないよね。俺は力

「プ」

「僕はリユートです。ちょっと待っててください」

リユートは馬車の中を覗く。中にいるのは、ネーゼと運転手だ。運転手はまだ少し警戒している。そして、ネーゼもまた馬車の奥で小さく座り込んでいた。

「ネーゼ、狼はいなくなった。もう大丈夫だ」

その言葉を聞いた瞬間、運転手は顔を輝かせる。しかし、一方のネーゼはまだ怯えているように見える。あんな状況の後だ。無理もないだろう。そうリユートが考えていたところで、カープが馬車の中を覗き込む。

「初めまして。ネーゼちゃん、でいいんだよね？ 俺はカープっていうんだ。よろしく」

「……ネーゼシアンです。よろしくお願いします」

ネーゼはぎこちなく返事をする。こちらは狼の影響ではなさそうだ。どうもネーゼは人見知りのようである。それを気にすることなく、カープはすぐにリユートへと視線を戻す。

「ねえ。この馬車って、もしかしてカミツテ行きだったりする？

いや、ネーゼちゃんってカミツテの民みたいだしさ」

「そうです。でも、その前にビラナへ立ち寄りますけど」
「そっか」

カープは少し考え込む。

「実は、俺もカミツテに用事があるんだ。歩きながら馬車を捕まえ

ようと思ってたんだけど、ちょうどいいや。俺もこの馬車に乗って
てくれない？ これも何かの縁だしさ」

そういえば、カープの目的地のことはアンナからも聞いていた。
リユートは少し考えるが、特に断る理由はない。

「僕はいいですよ。ネーゼは？」

その質問に対して、ネーゼはおどおどしながら頷く。

「そんなに緊張しなくて大丈夫だよ。俺って、こう見えてもか
なり紳士だからさ。別に襲ったりなんかしないって。ね？」

「……はい」

そんなやりとりに笑いながら、カープは馬車に乗り込んだ――が、
すぐに顔を出す。

「そうそう。敬語ってどうも苦手なんだよね。打ち解けられないっ
ていうか。せつかくの楽しい空気が台無しになっちゃうしさ」

そう付け加えた後、カープは馬車の奥へと入っていった。

（カープ・リトアレイン）

カミツテへ向かうその青年を加え、馬車は再び先へと進む。

時は進み、いつしか空は薄暗くなっていた。そして、馬車の進む
先には、灯の生み出す道が見え始める。その先にあるのは光の集落。
商業都市ピラナである。

2 ビラナの酒場

■最果ての商業都市ビラナ

「……」

気持ちのよい夜風が吹く。

リユートは振り返る。そこに見えるのは、今日宿泊している宿だ。石造の建物に、いくつもの窓が並んでいる。その一つ、ネーゼの部屋の灯りは消えている。もう眠りにについているのだろう。

リユートは街路に目をやる。もう二十一時を過ぎようかという時刻にも関わらず、まだ道行く人の姿は途絶えない。先日まで滞在していたカルテラとは大違いだ。

商業都市の名前通り、ビラナは商業が発展した華やかな街である。昔は小さな村だったらしいが、首都バリプレートから続く鉄道の完成後に急発展を遂げた。

特に目に付くのは、ローブ姿の学者達である。中には、首都バリプレートが誇る王立研究所から訪れている学者もいる。この地域には多くの精霊伝説が残っており、彼らはそれを目的に訪れているのだ。このような環境のため、必然的に学問も発展し、バリプレートに次ぐ第二の学術都市という顔も持っている。

リユートはゆっくりと歩き出す。

まだ体調の優れないネーゼを一人残すのは心苦しいが、夜間の数時間だけだ。大丈夫だろう。そう思ったリユートに声が掛けられる。

「よっ！」

その突然の声に、リユートは思わずその方を向く。そこに立って

いたのはカープである。

「どこへ行くの？ 夜遊びだったら、俺も付き合っけど？」

小さく息を吐き、リユートはその問いに答える。

「酒場だよ」

「へー、酒場か。だったら、誘ってよ。いい店を知ってるんだ。わりと新しい店なんだけど、オーナーがこだわってね。いい酒を出すんだ。お洒落だし、女性人気も高いし。噂話も豊富だと思うよ」

正直なところ、リユートにとって酒はどうでもいい。だが、噂話が豊富な点には惹かれる。リユートの求める”噂”を得られるかもしれない。

そのとき、リユートはふと思い出す。カープは亡霊騒動の件で活動している。馬車の中ではネーゼに気遣ってその話題に触れなかったが、この機会にその話を聞いておいてもいいだろう。魔王への手掛かりが何か掴めるかもしれない。

そう思いながら、リユートは先導するカープに続いた。

鈴の音が響く――が、それは同時に聞こえる騒がしい声にかき消された。かなり繁盛しているようだ。

薄暗い店内を照らすのは、所々にある古風なランプ。その配置、明るさの加減は絶妙で、まるで異世界を訪ねたかのように錯覚させられる。

リユートは店内へと進む。開放された小部屋から中の様子が伺える。確かに客層は広い。その一方で、やはり目立つのはローブ姿の学者達だ。中には学生と思われるような客もいる。また、カープの

言う通り、女性客が多い印象だ。夜中まで女性が酒場に立ち寄れる。これは、このビラナの治安のよさを意味しているのだろう。

奥まで進むと、そこは大部屋になっており、いくつものグループ達が盛り上がりつつあった。その中を進み、二人はカウンターの目の前まで到着する。

「いらっしやい」

カウンターの中にいた小洒落た服装の男性が、お約束の営業スマイルで声を掛けてくる。

「やあ、ジャックさん。また来たよ」

「ははは、カミツテに行ったんじゃなかったのか？ やけに早いね」

「いや、ちよつと縁あつてね。ここにいるリユートと一緒にいくことにしたんだ。リユート、紹介するよ。ここのオーナーのジャックさん」

リユートは一礼をした後、再びジャックを見る。

見た目は三十代半ばといったところか。店主にしては若い印象を受ける。左の薬指には指輪が見える。どうやら既婚者であるらしい。

リユートの視線に気づいたジャックは、爽やかに笑い掛ける。

「リユート君、でいいのかな？ いらっしやい。私はジャック。以後、うちの店をよろしく頼むよ」

「はい。こちらこそ。あの、カープとは知り合いですか？」

「ははは。客と店主の関係だよ。とはいえ、この店に訪れてくれたんだ。その縁は大切にしないとね」

「ジャックさん、話好きでこの店を開いたんだ。お客様は友達だつて、そんな感じだよ。そんな雰囲気もあつて、女の子のお客さんも多いんだよなあ」

そう言いながら、カープは酒場を見渡す。その視線の先は、店中の女性達。どう見ても不審人物だ。頼むから巻き込まないでくれよ、とリユートは心の中で呟く。

その様子を見て、笑いながらジャックはリユートに話し掛ける。

「それで、リユート君。何か飲みたいものはあるかい？」

「りんご酒はありますか？」

「もちろん。材料は豊富だからね。カープはどうする？」

「そうだなあ。あ、ビール頼みます。この間のレモンテイストなやつ」

「はい。かしこまりました」

ジャックは手際よく、注文の飲み物を用意する。そして、洒落たグラスにそれを注ぎ、二人に差し出した。リユートはそれを受け取り、一気に飲み干す。

りんごの風味が口中に広がる。心地よい甘さ。すっきりとした後味。そして、適度なアルコール加減。思わず、リユートの口から言葉が漏れる。

「おいしい……」

「だろ？ ジャックさんは、ビルナードの外で開かれている世界コンテストで入賞してるんだ。言ってみれば、世界認定の味さ」

カープはビールを飲み干す。その表情、仕草には何か達成感のよくなものを感じる。大げさすぎる気もするが、やはりそちらの味も極上なのだろう。

「もう一杯いくかい？」

「お願いします」

笑い掛けるジャックに、リユートはグラスを差し出す――。
そのときだった。リユートは隣に強い存在を感じる。咄嗟にその主を確認しようとする。しかし、それより先に大きな音が響く。その音源には、明らかに特注の巨大な木製カップが置かれている。そして、それを置いた主は、大きく、力強い声を発した。

「ジャック。こっちもだ。ぶどう酒を追加で頼む」

「分かったよ。ちょっと待っていてくれ、ハイン。それにしても、これで何杯目だ？　今日は随分と景気がいいじゃないか」

ジャックは手早くリユートのグラスを手取る。そして、りんご酒を注いでカウンターに置いた。その間にも、ハインと呼ばれた大男はジャックとの会話を続ける。

「まあな。でかい仕事が終わったとこだしな。どうせ帰ったら子守りで飲めねえんだ。今がチャンスってわけよ」

「ははは、アミスちゃんのことかい？　そんなこと言っていると、今度言いつけてやるぞ？」

「おいおい、そいつは勘弁してくれよ」

ハインが大声で笑っている間に、ジャックはぶどう酒をカップに注ぎ始める。巨大なカップだけあって時間がかかる……これを何杯も？　と、つつい視線を奪われるリユート。その様子にハインが気づく。

「よお、そんなにあのカップが気になるか？　ははは、俺との飲み比べに勝てたら譲ってやるよ。どうだ？」

「い、いえ……」

リユートは慌てて首を振る。

……無理だ。絶対に勝てる気がしない。リユートの心の声が聞こえたのか、ハインはさらに大声で笑った。

「ハイン。大切なお客さんなんだ。あんまりからかわないでくれよ」
「ああ、悪かった」

笑いながら、ハインはぶどう酒の注ぎ終わったカップを手取る。そして、すぐにその場を離れていった。安堵なのか、リユートは溜息を漏らす。

「すごいのがいたな」

同じく気になったのだろう。カープはまだハインの方を見ている。

「ああ、ハインか。たまに来るんだ。実際にすごい奴だよ。」ギルドのハイン” って知らないかな？ その筋じゃ有名な奴だよ。数ある賞金ギルドの中でも最強ってね」

「あ、名前は聞いたことある。そっか、確かに強そうだなあ」

「でも、根は優しい奴なんだ。元は騎士らしいしね」

「それは嘘でしょ？」

その視線はまだハインを捕えている。一際目立つその存在は、少なからず二人の心に焼き付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0583z/>

ツキを見て泣いたヒト

2011年12月17日10時50分発行